

希望の種

ふくおか NPOファイル

⑧

がんは日本人の2人に1人がかかり、死因の第1位を占めています。それでも正しい知識が普及しているとはいえ、検診を受けずに早期発見のチャンスを逃したり、告知を受けて絶望的になったりする人が多いのが現状です。

「NPO法人キャンサーサポート」代表理事の宮部治恵さん(47)は福岡市東区は15年前、子宮頸がんを経験しました。仕事中に突然大量の血を流して倒れるまでは、がんなど完全にひとごとだと思っていたそうです。子宮と卵巣を全摘出。2カ月近くの入院に加え、子どもが産めなくなつたことで、当時のパートナーとも離婚することになってしまったそうです。

キャンサーサポート

事務所=福岡市東区▽電話番号=090(4156)8686
メールアドレス=cansupo@psc.bbq.jp

命を伝えるがん教育

自分の体験をいかして、多くの人ががんの予防、命の大切さを知ってほしい。宮部さんが悩んだ結果に出した一つの答えは、子どもの頃から学校教育の中で学び、子どもたちから大人に伝えていくという「がん教育」の実践でした。

「いのちのホームルーム」と名付け、主に小中学校・高校に医療従事者とがん経験者をセッテで派遣し、正しい知識をセットで派遣し、正しい知識

2011年から始まった「いのちのホームルーム」は、県・福岡市が14年度に文部科学省の「がん教育充実のためのモデル地区に選ばれたこと」というきっかけで、誰かの力に頼らず、自分自身の力で命を伝える活動をしてほしいと、宮部さんはがん闘病時代、同じくがんで入院していた同世代の女性と親しくなりました。いつも強く、笑顔だった彼女は、見事がんを克服して退院。その直後、念願だった家族旅行の最中に海で溺れるという事故で亡くなってしまいました。

「そうか、人間は必ずいつか死ぬ。がんじゃなくて、事故や災害で死ぬのかもしれない、当たり前だが当たり前。1分一秒大切に、泣いても笑っても同じ時間が過ぎていくなら、笑って生きたい」と。その気持ちが、宮部さんの今日の一歩を、強く前に進めています。

(仮認定NPO法人「アカツキ」代表理事・永田賢介)

識と体験談を伝えるものです。福岡和白病院(東区)の全面的な協力を得て作成したイラスト付きの冊子や、黒板に貼り付けることのできるマグネット教材を使って分かりやすく伝えます。

終了後の感想アンケートでは、子どもだけでなく、保護者にもコメントを書いてもらう項目を設け、家庭内でコミュニケーションを促す工夫をしています。帰宅した子ども



キャンサーサポートの活動に協力している医療従事者とがん経験者は「スピーカー」と呼ばれ、現在は10人ずつ。このほかに遺族など「授業ヘルパー」もいます。希望者には年1、2回の養成講座の受講で団体の理念や、子どもたちへの伝え方を学んでもらい

がん経験者が自身の体験を子どもたちに語る「いのちのホームルーム」

11月、筑後市の羽犬塚小

原則毎週月曜掲載